

業もあった。

九月一日テイルマにて、全員ダモイの話あり。名前順に整列五百人くらいにて、私ほか五人を残し、営門を閉じ出発した。翌日五百人くらいの団体が到着した。

二十二年春頃よりきびしくなった民主運動のつるしあげ（将校摘出）。私も一般大衆として、後方にて参加が、今回自分にふりかかった。夕食点呼後、残留六人に対して、前職者（将校憲兵、警察官等）の摘出である。正面壇上に立たせられ、五百人の批判会である。批判と云うより罵声、怒声の繰り返して、不動の姿勢での対応は、なすすべなしで、終るまで時とのたたかいである。

翌日K、翌々日MS、五日後に警察官、七日後E他の収容所に転出。私一人容疑で終った。この一週間いきすぎた民生運動に夢遊病者のようになり、前途不要、希望なし、やけくその気持ですごした。

九月十日頃より一人の孤独な勤務、馬方（始めての馬扱い）。乾草刈り及び運搬、馬の放牧監視、食事運搬、便所運搬、短期間、踏切番等、建築官舎の材料監視（夜六時より朝八時）。一月、二月には、屋外的全般監視あり、

零下三十度から四十五度ぐらいの日が多く、遮蔽物を見つければ、薪の採暖で動きつづけ（凍傷凍死の警戒）、時間を過ごすのに苦労した。五月頃より皆と一緒の一般作業になった。

二十四年十月十三日、突然ダモイ命令、全員貨車にて出発。沿線日本人の姿なく、朝鮮人の収容所とかわり、作業する姿あり。十月十八日ナホトカ到着。十月二十二日夕、名優丸に乗船出港。十月二十五日舞鶴上陸。十月二十九日舞鶴乗車。十月三十一日夜八時故郷夕張着。

踊らされた青春

福岡県 尾花 保衛

聖戦!! 誰が名づけたのか? 君のため、国のためと、吾が青春は大陸の荒野に樹氷花咲き空も凍る、ソ連国境へと勇躍出征した。

腰には飯盆をさげ、手には銃をとり、欺慢におどられ、人間と人間の殺し合いに悔いても悔やみきれない過

ぎし歴史の汚点を思う。

昭和二十年八月の停戦詔勅の無条件降伏に一瞬吾が耳を疑った。明日の己が身を同僚と共に案じた。数日が過ぎた。或る日、突然隊長から「吉林師導大学」に集結を言い渡され、吉林省磐石県磐石から汽車に乗り、吉林師導大学に合流した。

ソ連軍の監視下で一か月ゆうよ何らなすことのないブラブラの毎日だった。脱走でもするか、誰に言うでもなく一人ごと。金網で囲まれた校舎であれば脱走も考えた。しかし、第一言葉が通じない。食糧調達も不安、中国人の反感もある。市中にはソ連兵もいる。中国人の暴動も起きている。脱走が見つかれば、直ちにソ連兵の自動小銃がおどり、たちまちにして地獄への道ゆきとなる。無防備で身一つの我々にはなすすべもなかった。

或る日、昼食を食っているとわかにそうぞうしく「ヤポンスキー、ダモイ、ヤポンスキー、ダモイ」とソ連兵がどなり立てるようにして通りすぎた。

「オイッ、何だ」「何だ」騒ぎのなかに日本軍将校が「静かに、静かに」と皆を制しつつ、「我々はこれから汽

車に乗り、祖国日本に帰る。全員急ぎ私物をまとめ、校庭に集合するよう」達示を聞いた我々の喜びよう、まるで児童の姿そのものだった。喜び勇んで指示に従った。ワイワイ、ガヤガヤ、声高に話し合ったり、間違ってるの私物を袋に詰め込み、なじられてる者、校舎の中は、まるで小学生の運動会のようなだった。

祖国を離れて幾歲月、思いは故郷の山や川、幼な友達顔が二重三重に映りすぎた。

師導大学をあとに車中の人となる。喜びを乗せた列車は、轟音をたてながら一路曝進、広い戦野の地に、果てしなく続く鉄路の上を突き進んだ。二、三日後、誰かが「オイッ、南はどっちだ!!」また、「誰か方角の分かる者はおらんか!!」すると、「いや!!北上しているんと違らんか」「北上しているんだったら話が違うぞ」。口々に叫びながら騒ぎが大きくなった。誰彼となく「真実を確かめよ」と、喜びは一瞬にして不安へとつものった。

日本人通訳の語るところによると「進路を北上して、シベリア鉄道に乗り替え、ウラジオストックに向かい、洋上輸送して日本に帰る朝鮮経由。大連経由は敗戦の日

本には皆さんを輸送する船が無いから、ソ連の軍艦で送り出す」とのことです。説明が終わると一同の者は安堵の胸をなで、再び雑談の娯楽が始まった。

十月の中頃、黒河の街に降り、ソ満国境を流れるアムール河を渡り、ソ連領ブラゴエシチェンスクの駅頭広場についた。時刻は日暮れどき、厳冬の中、肌を刺すような星空、積雪をかき分け、薪で火を焚き暖をとる。着の身着のまま、焚き火を囲み、零下二十数度の凍結した路上で前身を暖めたり背中を暖めたりした。真夜中頃、温度を尋ねたところ、零下三十度を下っているだろうとのこと。一刻の睡眠もとれず夜明けを迎えた。

一片の黒パンにかじりつき、再びシベリア鉄道の五〇屯屋根貨車の中に乗り込んだ。荒れ果てたシベリアの地、がいがいたる積雪のなかを晝も夜も扉を締めたまま、走る暗黒の人間輸送列車だった。

暗い、辛い、苦しい、寒い列車の中だった。「もう戦は終わったんだ」「日本に帰られるんだ」帰国を信じていた皆々が誰一人不安なく、故郷の特産物、おいしい食物の話に打ち興じた。夕刻シベリア鉄道本線のアレクサン

ドローフカ駅に着いた。ここで夕食、黒パン一切れにあずき少し極度の空腹を慰めた。

ゴトーンゴトーン、前進、バックを繰り返しながら再び輸送が始まった。

いよいよシベリア本線走行の旅だ。走れ走れ!! 広軌のシベリア鉄道は速い。凍った空気を引き裂くような鋭い汽笛の音。なかなか停車をやらない。小便や大便是貨車の戸を少し開け戦友につかまりながら用を足した。停車をするときは黒パンの配給のときぐらい。

突然誰かが「オイッこの列車の進行は西の方じゃないか」「西の方にいけばウラジオストックじゃないぞ」。少し扉を開けて沿線を見ていた友が、「見よ、沿線標識のキロメータの数がだんだん減っていくぞ」「ウン、きつとこれはモスクワを起点とした里程だぞ」。別の友も「きつとそうだ。モスクワ起点として計られた道程だぞ」。すると数人の友が「ウラジオの方ではなく、モスクワ方向だぞ」「だまされた!!」「だまされた!!」貨車の壁をたたきながら皆が口々にののしった。怒っても悔やんでも後の祭り。二、三日走っただろうか、とまった。全

員下車の号令で寒村の荒れ果てたような小さな駅にブツブツ言いながら降りた。

空き地の広いところに整列、隊互を組まれ肌を刺すような寒気の中を進まされた。凍傷にかららないよう鼻をこすり手をさすり凍りついた路上の行軍には活気もなく、意気もあがらなかった。意気消沈。無言の歩みは、まるで屠殺場に向かう羊の群のようだった。

山の中へと突き進んで行くうち、と或る大きな建物の前に止まった。それは、奥深い山の中につくられた、旧囚人収容所のあととのこと。周囲は丸太で組み込まれた、高さ六メートルもある厳丈な柵で、その柵の内外にさらに二メートルくらいの柵がつくられ、三重に囲まれた脱走防止の柵である。約四百人の将兵は、ソ連兵の銃剣に取りかこまれながら収容所のなかへと追いこまれた。大きな門は容赦なく閉ざされ、収容所の四隅の高いやぐらには、早速警戒のソ連兵が立った。いよいよ厳凍の地、極寒のシベリアでの抑留生活が始まった。

日本人でロシア語の出来る人が通訳となり、ソ連軍収容所長（独ソ戦で負傷した気の荒い中尉）と日本軍将校（大尉）との間で、日常生活について守らなければなら

ない規則並びに注意があり、日本軍将校の言い分は何ら通することはなかった。規則制約を破る者は即座に銃殺するという厳しい通告だった。身振り手振りで話す収容所長の態度に、敗軍の日本とはいえ、将兵の皆々にふんぬの敵意をあたえた。

入所二日目の夜、我々の仕事は「伐採」と知らされ、ノルマは一人当たり三リューベ（切った丸太の先の径が三十センチで長さ六メートルのものが六本枝を落とし、一定のところに運搬集積まで）。十人一組となり、二人引大型鋸と斧が渡された。全員がノルマを一〇〇%あげるような話があった。ノルマが達成出来ないときは、翌日の食事は減食にするとのきびしい仕事。

三日目から、伐採作業に軍服のうえに防寒外套を着込み、防寒靴は間に合わず、第一日目はその様な服装で、梓のない三十屯撃引トレラーに乗せられ、奥の山へ、更に徒歩で約一時間、深い雪の中、太ももまでうまりながら山へと登った。目前に広がる広大な森林。シベリアは森林地帯とは聞いていたが、余りにも無限に広がる大森林に驚いた。両の腕をまわして、やっと取り巻く様な赤松の太木、一直線に伸びた「さま」は内地の杉の様であ

る。

息をはずませながら、伐採、六メートルに玉切った大きな丸太を数人で転がしたり、だき抱えたりして集積場所へ運び、またもとのところまで登る伐採の繰り返し、慣れない作業に極度の疲労と心身の消耗に、収容所に帰った時は言葉もなく、寒さにふるえながら、ペーチカをたこうにも薪は生木、夕食を食ったら何もかもなく、荒い板張の二階建寝台にゴロ寝、壁は丸太の積み重ね、内側は凍結した白い氷の壁、入浴も出来ず、防寒帽をかぶり、防寒外套を着たまま、靴もはいたまま配給の二枚の毛布にくるまった悲惨な姿は、流刑のシベリア囚人よりもひどい寝起きの生活だった。

ノルマはなかなかあがらない。未達成のため、朝と夕の食事は「トロトロ」の粟のカユが飯盆の中蓋に一杯、キャベツの葉が一切れ、二切れ浮いた塩味のスープ。これも中蓋に一杯、晝は黒パン（二百五十グラム）一個とジャガイモの薄く切ったのが二切れ、三切れはいった塩スープ。これも中蓋に一杯、三食分を一度に食っても満腹にはならない。

伐採作業にはソ連軍の警備兵がつき、疲労と衰弱で動きがにぶいと「ダワイダワイ」（早くやれ）と銃の台尾でこづかれたたかれる。食糧の不足は身体の衰弱を増し、作業は遅々として進まず、追いまくられ、ころび、深雪の中に倒れ起きあがる力もなく、にぶい動きのところへ、切り倒されてくる大木に逃げきれず、悲運にも下敷きとなり瀕死の重傷にあった友をまのあたりに見る。

警備兵は一瞬驚いた様子だったが、あわてることもなかった。ソ連人の現場監督も全員に作業中止の指示をするでもなく、日本人二人に命じ、急ぎ担架をつくらせ重傷の友を乗せ下山させ、作業は夕刻まで続いた。

衛生管理のない収容所生活は「ノミ」「シラミ」の発生となり、日を経つて群れをなし、各人の下着衣類には「シラミ」が列をつくりはいまわっていた。滅菌設備もなく、夜、ペーチカの焚火の明かりで爪先でつぶす以外に方法はなく、指先は血のついたように真赤になった。

熱発患者ができ「発疹チフス」患者がでて医療設備も薬もなく、ソ連軍の医者もおらず、不幸にして日本軍にも医者はいなかった。衛生兵の診断で隔離するのが精

一杯で、人里離れた山奥の抑留生活ではなすすべもなく、作業から帰ってみると熱発患者はすでになく、あの世の人、二度と仲間の顔を見ることもなく、友は淋しく死んでいった。

栄養失調者は増え「発疹チフス」は蔓延し、患者の食べ残しを食べれば、翌日は死が待つ吾が身と知りながら、極度の空腹には摂生の理性もなく、一刻でも良い、空腹を満たすことに我を忘れ、かくれて一気に飲みくだす姿は、まさに餓鬼道そのもの、翌日は、熱発数日後には無言の死を横たえ、悲しみのなかにもまたあわれであった。一日も早く日本に帰ることを念じ、幼い吾が子に会えることを、口癖のように唯一の楽しみにしていた友が、願いかなわず異国の地に帰らぬ人となった。

吹き降ろす吹雪のシベリアは寒からう冷たからうと祖国で一日千秋の思いで待つ父母や妻、幼子に永遠の別れをした友を今更ながら不びんに、はるか遠い遠い北の空をみつめ、生きてふたたび帰らぬ友の霊に静かに臉を閉じ合掌する。

ダモイ東京

和歌山県 土 永 勲

昭和二十年八月十五日、正午、重大発表ありとして、陛下の玉音を聞き日本の敗戦を知った。当時ハルビン第二教育部隊に勤務していたが、ハルピン飛行場において、武装解除をよぎなくされた。日本に帰国するのしらせで海林に集結したが、三か月ほど経ってもいっこうに帰国出来るようすもない。毎日のように汽車は走っているのに、こんなにも多くの軍人や民間人がどの方向に移動させられているのか、そのときの私たちには知るよしもなかった。

冬將軍の気配も濃くなった十二月もなかばに、やっと車上の人となった。貨物列車が動いて南下するので、ウラジオストック経由で帰国出来るのだとばかり思っていた。それは、私たちの思い違いで、列車は間もなく北に向かっていたのだ。途中、列車はニコリスクに停車し、